

マイウルノの王様

日野 舜也

スーダン中東部、ブルーナイル西岸、センナールの南15キロほどのところに、マイウルノという小さなまちがある。人口1万5000人、河畔の砂地の多いまちである。ブルーナイル州のエロセイレスで西アフリカからのイスラーム移住民フェラータのフィールドワークをやっていた1983年、フェラータの人々の話のなかに、しばしば、このマイウルノのことが出てきた。それは、対岸のシェークタルハとセットで語られることが多かった。

1903年、ナイジェリア北部ソコトの神聖イスラーム王国は、イギリス植民地勢力との戦闘に敗れ、時のカリフ、モハマドゥ・アッティルは、多くの部下と共に、東のスーダンをめざして敗走した。スーダンのハルトゥムには、1882年から1899年、マフディを名乗ったムハンマドゥ・アハマドゥが確立したマフディ支配が続き、おおくの西アフリカのムスリムたちは、植民地勢力の圧迫に対し、イスラームの救世主の出現を信じ、そのご加護をねがっていた。アッティルは、ヒジュラを敢行して東方にむかうのだが、ナイジェリア東部のプルミで英軍と戦い敗死する。アッティルの5男のムハマドゥ・ペッコ・マイウルノが、残軍を率いて、はるばるとスーダンまで逃れ、1906年にこのマイウルノに居をさだめた。スーダンには、18世紀から、救世主マフディの出現を信じて、メッカにむかった、おおくの西アフリカのムスリムたちが集まっていた。マフディ支配が確立すると、彼らのおおくは、その傘下に参じ、いわゆるアンサールの中核となった。マフ

ディ体制崩壊後、主を失ったかれらは、ブルーナイル流域部へと散っていった。マイウルノ対岸のシェークタルハは、フェラータ出身のイスラーム教師で、多くの奇跡を行い、聖人崇拜の対象となったシェークタルハが建設したまちであり、ブルーナイル地域のフェラータ侵攻の中心であった。多くのフェラータにとって、かれらの故郷ソコトのカリフにつらなるムハマドゥ・ペッコの到達と、シェークタルハ対岸でのマイウルノの建設は、ばらばらのフェラータにひとつの中心、こころの拠り所ができることを意味するものであった。

支配者イギリスにとっても、このマイウルノの成立は、決して排除すべきことではなかった。植民地勢力にとって、言うことを聞く支配者の出現は、命令系統の整備につながるものであり、実際に、労働者の徴収、集税組織として機能することになった。こうして、フェラータの思いと、植民地勢力の意図とが一致したのである。そして、そのあと、西アフリカからメッカをめざすムスリムたちがマイウルノ南方のブルーナイル州に参集したのであった。

わたしが訪れたペッコの曾孫アッティルは、わたしの求めにおおじて盛装でカメラに収まってくれた。その姿は、ソコト王国の一部であったカメルーンのアダマワ首長国のラーミード（首長）の威風堂々にくらべて、いかにもいじけきってみえた。その屋敷は、確かに広大であったが、家臣の姿もほとんど見えず、寂寥として荒れきっていた。

(ひの しゅんや 京都文教大学)